

秋の氷菓

隅田俊子

秋の氷菓

隅田俊子

歌 集

秋 の 氷 菓

略歴

大正14年 6 月 東京に生れる
昭和18年 3 月 都立桜町高女卒業
昭和28年 1 月 「鶉苑」入会
昭和28年10月 「近代」入会現在に至る
現住所 浦和市常盤町10ノ25

近代叢書第6篇

昭和35年 6 月 13 日 印刷

昭和35年 6 月 20 日 発行

著者・隅 田 俊 子

印刷・神谷印刷株式会社

製本・株式会社熊倉製本所

発行・四季書房

東京都千代田区神田司町2〜21

振替東京72043・電話(231)5954

定価200円

序にかえて

最近になっても、小林さん、とうっかり言ってしまうことがある。いまはもう隅田俊子さんであり、りっぱな若奥様である。此の歌集の内容はしかしほとんどその小林さん時代のもので、巻末のほうに結婚後のものが少し加えられている。

女性にとって結婚するということは生涯に於ける最も大きな出来事であることはいうまでもない。もう二年ほど前のことになるであろうか。その結婚の披露宴によべたばくは、お祝い

のスピーチでまず俊子さんの人柄をたたえたのち、その歌集の出版を御親族、知友の方々を前にして御主人にほとんど強制的に承諾して貰ったことを、いま想い出す。というのは、やや婚期のおくれておられた俊子さんが、幸にして良縁を得られ、いよいよ二、三日後に式の迫ったおそらく誰しもあわただしいこと限りなく、なんとなくそわそわとしてほとんどなにも手のつかないというのが普通であらう時、いつもと変わらず歌稿を締切前にちゃんと送って来られ、さらにおっかけて結婚式の前日、その内の一首の訂正までとどけられて来た。その冷静さ、落着きというか、真面目さ、几帳面というかにほとほと感心したことを述べ、加えて此の短歌に対する熱意というものが、万般に処するしずかだが強い意志を伴うりっぱな生活態度にほかなら

ぬのだ、といったような意味のことを言つてほめ、さて、と新郎さんにむきなおつて、このような花嫁さんの生活にしめる短歌の位置を十分おくみ下さつて、結婚後も作歌することをお認めいただく、と共にいままで精進して來られた歌業をひとまずまとめる意味で、歌集を出版されることを重ねて許してあげてほしい、となみいる人達の前でお願いしたのであつた。そこで大きな拍手がしばらく続いたと記憶しているのだが、このようなことからこの歌集はその時のぼくの発言が公認のかたちとなつて、いま出版されようとしている、とぼくはぼくなりに解釈して、格別に嬉しいのである。

いまの世の夫は、妻にあれをやつてはいけない、これをして

はいけないと制限することもすくなくなったであろうが、それでも結婚後作歌を続けることは、主婦として容易でないであろうのに、俊子さんはその後いよいよ明るく、力強い歌境の展開を示しており、ここに第一歌集の出版をみるに至ったことはまことにめでたく、俊子さんのよろこびはいうまでもないことであらうが、これを機にさらに本格的な作歌にはいられて、ますますその資質をみがかれることを期待してやまない。

作品そのものに就いては、なるべく多くの人に読んでいただき、自由にいろいろな批評をうけることが本人にとって有難いことであって、ここでばくがとやかく言わぬ方がいいと思うのだが、女ばかりのきょうだい一番うえ、つまり長女として育

って来られた家庭生活の機微の間を、その性格通りしずかでひかえ目ながら、根の実にしっかりしたもののみかたでみつめ、ときに可なり鋭い批評精神を働かせて描きあげたものなどに特色ある佳品を見出すことが出来る。とくに後半に至って、感覚の美しさと相まって適度な抽象が作品的に高め、表現も初期のやや幼いところの残っていたあともだんだんと洗煉されて、調子に張りといびきとが感ぜられて来ている。

勿論この一卷を世にとうて、などと俊子さんも考えているわけではなく、謙虚に過去をふりかえり、ここを出発点に、さらに一層の努力をかさね、すこしでもいい生き方をし、すこしでも歌境の進展をはかりたい気持に違いない。どうかみなさん、

忌憚のない御批判と御鞭撻をお願いしたい。序にならぬ一文、著者の明口を祝福して。――きょうは朝からめずらしい五月晴である。

加藤克巳

目次

I 鏡の中の午前

鏡の中の午前……………	13
秋の氷菓……………	16
サルビア……………	25
午後のかなしみ……………	28
ばらの刻……………	32

II

冬の蝶

荒野……………	69	遠い空……………	45
真昼の殺意……………	66	道標……………	41
晩夏……………	64	鰯雲……………	37
干潟……………	59		
冬の蝶……………	53		

Ⅲ

街混沌

海峡	74
白昼のわらい	76
われの原型	78
潮のにおい	81
刃	87
白き叫び	90
街混沌	92
底辺	96

冬の壁面……………	103
わかれの素描……………	106
黄なる部分……………	110
緑の会話……………	119
薄暮の種子……………	123
原色の朝……………	127
航海……………	131
序にかえて・加藤克巳	
あとがき・隅田俊子	

歌
集

秋
の
氷
菓

鏡の中の午前

部屋掃除おわりしままに坐りいる鏡の中
に午前は流れ

カレンダの緑の牧場恋いているひとりの
娘を知っていますか

靴下のすじ直さんと身をねじる鏡の中に
青葉も映る

日附ずれし封書なげ入れしたまゆらの心
みずから閉じて戻れり

きびの穂も太陽光にうなだれて夏きりき
りの頂点にある